

一、まへがき

日本染料製造株式會社における労働紛議

戦争はひたすら生産力の擴充を希求して止まずしたがつて労働の生産性向上はその最も重要な條件を構成するものであるが、他方懸召經濟力の膨脹、等のために労働力の配置が困難となり労働力不足が著しく現象化し、それがために個別資本の側においては勢ひ過重労働時間を以て増産政策を強行せんとするに至る。しかるに労働時間の延長は知らず知らずのうちに労働者の肉体をむしばんで行く重大なるメントを作り労働力は次第に磨滅せざるを得なくなつて来る。労働力の磨滅こそは労働の生産性向上とはおよそ對蹠的關係に置かれて居りそれ故、かような問題は戦争が要求する生産力擴充政策を強く反對の方向に押しやり、却つて低下傾向さへ誘因するのである。この矛盾を解決するものは即ち戦時社會政策の任務でなければならぬ。それ故厚生省においてはさきに就業時間制限令を設け、ともすれば時間の延長に流れんとする個別資本の經營政策に一つの限界を與へ、總資本の